



医師が学べる環境を提供する役割

山形で農村医療に従事した後、横浜でホスピス・緩和ケアを学び始めたのが1994年の8月からでした。あっという間に22年が経ち、23年目を迎えます。何年学んでも、何人関わったとしても、これで良いというゴールはありません。常に新しい患者さん・家族と出会い、その一つ一つから多くのことを学んでいきます。ホスピス病棟で12年仕事をした後に、現在のめぐみ在宅クリニックを開設して10年目を迎えます。開設当初は、医師一人で診療していました。その後、多くの皆様のお力を頂き、現在では常勤医師6名、非常勤医師9名体制で24時間365日の診療を提供するまでに成長しました。毎月の新規の相談は40件を越えます。在宅看取りも1ヶ月で30名を越えるようになりました。

大切な事は数ではありません。一人ひとり、ていねいに関わる事を大切にしています。課題も多々あります。民間のクリニックですから、赤字が続いて良いわけではありません。それなりの売上げが必要です。幸いなことに、めぐみ在宅クリニックは有料老人ホームやグループホームなど介護系施設の担当は、他の在宅医にお願いしてきました。落ち着いている人の診療ではなく、いのちが限られる苦しみを抱えた人と、その人を支援している人を応援したいと考えていたからです。そのため、診療報酬改定で介護系施設の点数が下がっても、ほとんど売上げに影響がありませんでした。国の方針が、住み慣れた地域で人生の最期まで関わり、看取りまで支援するクリニックを求めているからです。

めぐみ在宅クリニックのミッションは、このテーマに関心を寄せる医師に、在宅緩和ケアを学べる環境を提供することと考えています。去年7月から今年6月までの集計では、めぐみ在宅クリニックとして在宅看取り312名の患者さん・家族との関わりを学ぶ機会に恵まれました。どんなに本を読んでも、どれほど学会に参加して発表を聞いても、ひと一人看取る事は容易ではありません。例えるのであれば、どれほど本を読んでも泳げないのと同じです。

ただ看取るのではありません。大きな苦しみを抱えた人が、自らの苦しみに何を学び、何に気がつき、自分の尊厳を取り戻し、残していくことができるのか、1対1の対話や、多職種連携を通して学ぶこと大切にしています。自らがロールモデルになれるよう、自らの実践を共に働くスタッフに陪席する機会を提供していきたいと思ひます。

病気の診断と治療であれば、学ぶ機会は研修病院とし

て全国に数多くあることでしょう。緩和ケア病棟も各地に増えて来ました。しかし、在宅という環境で、誠実に看取りに関わる事を学べる環境は限られています。めぐみ在宅クリニックは、医師が学べる環境を提供する役割があることを大切に、活動を続けて行きたいと思ひます。

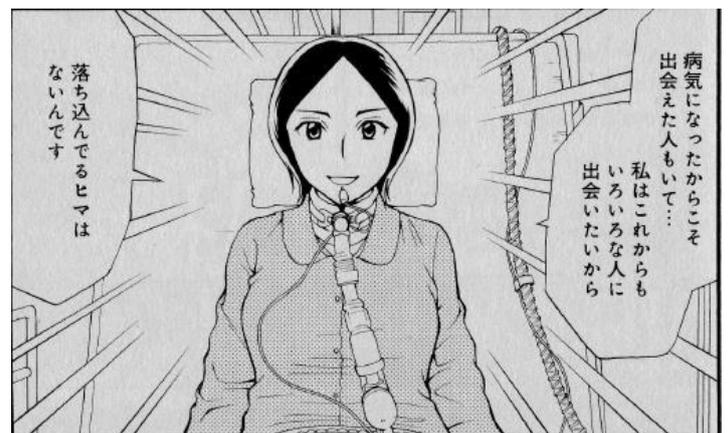
小澤竹俊

地域医療枠の研修医の先生が学びに来ています

めぐみ在宅クリニックでは、2年目の研修医の先生が4週間学びに来るプログラムを提供しています。今年度も4名の先生が学びに来る予定で、7月は聖マリアンナ医科大学の井上先生にお越し頂いています。大学病院では学べない在宅での患者さん・家族の表情を大切に、大切な対人援助を学ぶ機会になればと願ひます。

川口美怜さんが紹介されました

2016年3月に第104回地域緩和ケア研究会に御登壇頂いた川口美怜さんが7月2日発売の「フォアミセス」に「前を向いて」で紹介されました。ALSという難病と向き合い、闘病を通して学んだことを伝えたい思いで、人工呼吸器をつけながらもブロムスピーチカニュレを用いて発声することができます。美怜さんのメッセージが多くの人に届くことを応援しています。



診療実績

	2006- 2015年	2016年 1月~2月	2016年 3月	2016年 4月	2016年 5月	2016年 6月	2016年 計	総計
訪問回数	41,344	1,539	784	834	866	823	4,846	46,190
自宅永眠	1,528	46	15	23	34	24	142	1,670
施設永眠	158	7	4	5	3	6	25	183
在宅 (自宅+施設)	1,686	53	19	28	37	30	167	1,853
病院永眠	397	14	7	3	6	8	38	435